

一般社団法人日本社会福祉学会 第 65 回春季大会 報告

全国大会運営委員春季大会担当 山野 則子 (大阪府立大学)

大会テーマ：教育と福祉における協働の論点を探る

開催日時：2017年5月28日(日) 13:00~17:00

開催会場：明治学院大学白金キャンパス本館3階 1301教室

2017年度日本社会福祉学会春季大会は、教室に椅子を入れ、ほぼ満席の状態のなか、岩崎晋也会長から、冒頭に教育と福祉の論点を探ることへの意義と期待が述べられ開会した。

まず2017年度日本社会福祉学会春季大会は、教育と福祉の協働を探るために、基調講演として、京都大学こころの未来研究センターの広井良典氏から「教育と福祉の連携—ポスト成長時代の社会構想とケア」と題して基調講演をいただいた。「持続可能な福祉社会」の可能性にとっては教育と福祉の連携が不可欠であるとの指摘から始まり、教育と福祉という二つの領域はいずれも“人が人をケアする”代表的な分野でありつつ、教育は近代化経済成長に貢献する人材の育成を主な目標とし、福祉はそこから生じる格差やリスクへの対応、困難を抱えるものへの支援を対象としてきた、パラダイムの違いが述べられた。社会保障給付における高齢者 68.7%、子ども 3.3%という日本の傾向は、破たんしたギリシャと同じ傾向であること、教育は人生の前半、子どもや若者世代に対するものであるのに対して、日本の福祉の対象は人生の後半部分を多く含む、事後的な救済・支援が重視されてきたこと=from school to workの単線モデルは成長型社会モデルとして機能しなくなっていることなど指摘された。

政策的対応として、人生前半の社会保障「共通のスタートラインに立つ」こと、例えば20代の生活保障は結婚や出生率への影響もある。社会保障の視点に関して「フロー」だけでなく「ストック」=「資産」の格差に目を向けていく必要性、「福祉の哲学とは何か」、個人の可能性(潜在性、内発性)を引き出す営みとその制度的保障としての福祉と教育という視点=可能性の再分配、「事後」的対応から「事前」的対応への視点、ヨーロッパの教会が果たした「教育と福祉」補完性の原理の考え方から見るコミュニティとローカル化=居場所(ある地域の調査では学校が一位)、オルタナティブな社会モデルとして環境と福祉の問題を統合して考える視点(ジニ係数と環境パフォーマンス指数(EPI)に関して、成長戦略をとっているドイツ、北欧などの国々は環境や福祉を考え、環境パフォーマンスは高く、ジニ係数は低い、つまり格差が小さい傾向にある)などの視点を「持続可能な福祉社会」として提示された。

シンポジウムでは、まずシンポジウムの企画趣旨として、本報告者である山野則子(大阪府立大学)から教育と福祉の法改正(例えばスクールソーシャルワークが位置づけられたこと)含む国の動向の上で教育と福祉の協働の論点を探る意義を述べ、学齢期に限ることや協働の課題を焦点づけた。続くシンポジウムでは、同じく本報告者から全数把握と予防的対応がなされているのは乳幼児期までであることから、すべての子どもを視野にした学校の持つ意味、子どもが主語になりにくい教育と福祉の連携のあり様に関して具体的に課題提示し、協働の視点としてチーム学校、学校プラットフォームについて述べた。小川正人氏(放送大学)からは個別ニーズや教育と福祉の連携を阻んできた教育行政施策と学校の仕組み、「文化」

について丁寧に述べられ、機能拡大していく学校において地域包括ケアをどう考えたらいいのか、地域拠点でできないのかという視点、十分な人的資源の投資がないと従来の拡大再生産にとどまる懸念が示された。主に学校を主語に述べられた。原田正樹会員（日本福祉大学）からは、地域共生社会に向けた改革、社会福祉法の改正の動きが紹介され、法改正で新規条文の地域生活課題のなかに教育が入り、包括的支援体制のなかに位置づけられたことが紹介された。地域を主語にした時に飲み込まれないかの懸念を挙げ、熟議、協働、マネジメントのキーワードが述べられた。松本伊知郎会員（北海道大学）からは、子ども観の変遷から権利主体としての子どもをとらえる重要性、教育・学校の持つ選別機能、教育と反貧困の機能をどのように付与できるか、子どものミニマムを考える必要などの指摘の上、今後何が守られないといけないのか学際的研究が必要と結んだ。

これらの議論をコーディネイター山縣文治会員（関西大学）がコメンテーターとして登壇した基調講演者である広井良典氏を交えて議論を活発化させ、会場からは多数の質問・意見シートが寄せられ関心の高さがうかがえた。多くの議論が交わされ、学校と福祉だけでなく地域を入れていくことの意味を考える、そして全体性をさらに俯瞰的にとらえることの重要性、見え方が違うことも包括して考える必要があることの重要性でまとめられた。

最後に黒木保博副会長から、閉会の挨拶がなされて閉会した。